

イ 授業力向上に関する研究

確かな学力の定着と向上のために、分かる授業、楽しい授業を通して、自ら学び自ら考える力を育成することが求められている。次の各教科においては、授業改善のための具体的な提案を基にした授業実践や、教材・教具の開発などを通して、授業力の向上を支援する研究に取り組んだ。

(7) 国語科

国語科では、PISA調査や全国学力・学習状況調査で課題とされている思考力、表現力などを育成するために、言語活動の充実を図る学習指導の在り方について研究することとした。「言語活動の充実」は、今回の学習指導要領の改訂で、充実すべき重要事項の第一に挙げられている項目である。中央教育審議会答申（平成20年1月）においても、国語科における言語活動として、漢字の読み書きから始まり、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある、と述べられている。

そこで、様々な言語活動を効果的に取り入れた授業を実践し、成果と課題を検証することを通して、授業力の向上についての支援をすることとした。なお、以下に紹介する授業実践のうち、
、
、
は、研究員の先生方が実践された授業であり、
は、訪問研修で参観させていただいた授業である。

a 言語活動の充実を図る授業実践

小学校第4学年「記録文を書く」

小学校第4学年において、説明的な文章「アーチ橋の仕組み」（教育出版）を学習した後、記録文を実際に書く学習の中で、話し合いなどの言語活動を取り入れた実践を紹介する。授業の概要は、次のとおりである。

授業の冒頭に、指導者が実験をして見せ、実験したことを基に、児童とともに話し合いながら、黒板に張った大きな用紙に記録文を書き入れていく（図1）。児童とともに完成させた記録文を、教科書に掲載されている記録文と比べ、評価する（図2）。

2～3人のグループに分かれ、話し合いながら、自分たちが実験したことを基に、記録文を書く。図3は、児童が実際に書いた記録文である。

お互いに記録文を読み合い、相互評価する。



図1 指導者とともに実験する



図2 教科書の記録文と比べる

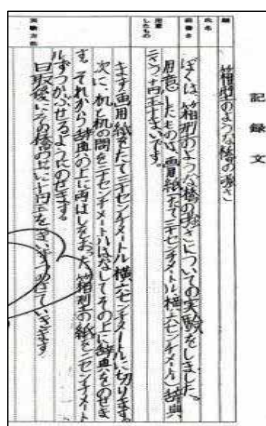


図3 児童の記録文（一部）

の活動により、記録文を書くことに対する抵抗感が少なくなった児童たちは、グループで話し合いながら、自分たちの記録文を書くことができた。また、相互評価を通して、読み手を意識した記録文を書くことができた。では書き手を固定させないよう、リレー形式で全員に書かせるなどの工夫が必要であろう。

小学校第4学年「一つの花」

小学校第4学年、文学的な文章「一つの花」（教育出版）の学習に当たって、「一つの花」が意味しているものについて根拠を明確にして発表し、発表されたことに対して自分の考えとの共通点や相違点を考えながら、話し合う活動を取り入れた実践を紹介する。

児童は、「一つの花」は「命」を表している、「お父さん」を表しているなどと、本文に書かれていることを根拠にして発表した。二人の児童の意見を次に示す。

私は、「一つの花」は「一つの命を大事にする」という意味を表していると思います。そのわけは「一つだけのお花、大事にするんだよう。」と言っているお父さんが、「命は一つだけだから、ゆみ子は一つの命を大事にしてね。」という思いを コスモスにこめたと思うからです。

ぼくは、「一つの花」は「一生けん命生きる」というお父さんのメッセージを表していると思います。77ページに「お父さんは、プラットホームのはしっぱの、ごみすて場のような所に、わずれられたようにさいていたコスモスの花を見つけたのです。」と書いてあります。一生けん命生きているコスモスをゆみ子にあげたから、「一つの花」は「一生けん命生きる」というメッセージだと思います。

根拠を明確にして話したり書いたりすることは、読解力の向上のためにも必要な能力である。児童たちは、上の二人のように、根拠を明確にして自分の考えを書き、書いたことを基に発表していた。話し合いの司会は特に置いていなかったが、それぞれの発言者が、進行の役割を果たしており、日ごろから活発に話し合い活動をしている様子うかがえた。また、指導者ができるだけ発言を控えており、児童の言語活動を中心に据えた授業であった。一方、児童の読みを深めるためには、指導者がコーディネーターとしての役割を果たしながら、話し合い活動をさせることも必要であろう。

中学校第1学年「故事成語」

中学校第1学年において、漢文の最初の教材「矛盾」を学習した後、グループに分かれて、「推敲」^{すいこう}、「蛇足」^{だそく}、「漁夫の利」などの故事成語について調べ、紙芝居にして他のグループに紹介する活動を取り入れた実践を紹介する。図4は、グループに分かれて紙芝居を作っている様子、図5は、紙芝居の発表会をしている様子である。



図4 グループで紙芝居を作る



図5 発表会の様子

紙芝居は、故事成語の基になっている話を四つの場面に分けて表現させた(図6)。どこで場面を分けるか、話の内容をどのように紹介するか、などについてグループで話し合う中で、生徒たちは要約力や表現力を身に付けることができた。紙芝居の発表会の際には、相互評価をさせた(図7)。



図6 「推敲」の紙芝居

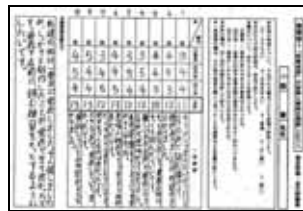


図7 相互評価表

相互評価や自己評価に書かれた意見を紹介する。

紙芝居には、班それぞれの工夫がみられてよかった。みんなの発表を評価することで、自分の班のできていないところが分かってよかった。また、紙芝居にすることで、故事成語の意味が分かりやすかった。発表会を終えて、故事成語のことがよく分かった。紙芝居を作るのはとても楽しかった。自分の知らない故事成語を、各班ともうまくまとめていた。この授業で学んだ故事成語を生活で生かしていきたい。

上に書かれた意見に代表されるように、生徒たちは、生き生きと言語活動に取り組んでいた。この活動を通して、「古典に親しむ態度を育てる」という目標が達成できたものと考えられる。

高等学校現代文「虚ろなまなざし」

高等学校現代文における評論教材「虚ろなまなざし」(岡真理 三省堂「高等学校現代文[改訂版]」)の学習において、様々な言語活動を取り入れた実践を紹介する。なお、この実践は、10年教職経験者研修講座において、模擬授業の形で実施した。

取り入れた言語活動は、ワークシートを活用して評

論の構成図を完成させる、評論で説明されている写真に吹き出しを入れ、筆者の主張を理解させる、筆者の主張を踏まえて小論文を書く、の三つである。必要に応じて、ペア活動、グループ活動による学習を取り入れており、生徒の意欲・関心を高める工夫がなされていた。

授業後、「授業評価システムガイドライン」(愛媛県教育委員会 2007)を活用して、授業研究を実施した。高校においても、付せんを使ったグループ協議(図8)、全体協議(図9)を経験することにより、授業改善の意識が高まるものと考えられる。参加者からも、研究協議が活発に行われて有意義であった、という意見が出された。



図8 付せんを使ったグループ協議



図9 全体協議

b 児童・生徒、指導者の意識調査

「言語活動の充実を図る授業」について、県下の指導者がどのような意識を持っているかを調査した。

調査対象：愛媛県下の小学校165名、中学校37名、
高等学校34名の国語の指導者
調査期間：平成20～21年度

国語の授業で自分の意見を述べたり書いたりする機会を「多く設定している」と回答した指導者は、図10のとおりである。一方、今年度の全国学力・学習状況調査では、「国語の授業で自分の考えを話したり書いたりしているか」という問いに、小学6年生は56.3%、中学3年生は41.6%が「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答した。指導者との意識の差がうかがえる。

また、小集団あるいは全体で交流したり話し合ったりする機会について、指導者の意識は図11のとおりであった。いずれの調査も、学年が上がるにつれて、児童生徒が言語活動を行う機会が少なくなっている。



図10 自分の考えを述べたり書いたりする機会 図11 交流したり話し合ったりする機会

c 今後の課題

今後、文章の内容などの要約・紹介、文章の批評・評価などの言語活動を取り入れた授業を実践し、授業力向上のための支援に取り組みたい。なお、本研究において実践した授業の指導案やワークシート類、また、意識調査の結果は、教育センターのホームページに掲載する。